

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02659

研究課題名（和文）転換期における民衆的教育思想の生成に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Study on the Generation of People's Educational Thoughts in the Transition Period

研究代表者

宮崎 隆志（Miyazaki, Takashi）

北海道大学・教育学研究院・教授

研究者番号：10190761

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,620,000円

研究成果の概要（和文）：転換期としての現代社会において生成しつつある新たな教育思想について、地域の保健・福祉・社会教育にかかわる実践事例の分析により、（1）教育学の基礎範疇としての民衆概念の可能性、（2）民衆思想における根源的価値としての「いのち」、（3）「いのち」を意識化する実践の論理、（4）赦しとしてのシステムの再構成と世界観の転換、（5）民衆的教育思想の可能、の5点により特徴つけた。「いのち」とは生命・生存・活動の諸相より構成された価値概念であり、民衆的教育思想の体系性の根拠となるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日常生活者としての民衆を教育学の基礎範疇として措定することにより、学習主体の概念を拡張しつつ、社会を創造する学習と教育の論理を導く可能性を示した。日常生活者にとっての根源的価値を生命・生存・活動の三相からなる「いのち」として剔出したことによって、現代の教育を批判的に検討する際に頻出する「いのち」という概念が、どのような教育実践と教育思想を生み出す可能性を有するのかを明らかにすることができ、また赦しの論理を仮説的に整理することにより、様々な価値が対立する現代社会における平和を志向する教育の論理を検討する手がかりを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：By analyzing examples of practices related to local health, welfare, and social education, We have characterized the new educational thought that is emerging in contemporary society as follows: (1) the possibility of the concept of the people as a fundamental category of education, (2) "life" as a fundamental value in popular thought, (3) the logic of practices that make "life" conscious, (4) reconstruction of the system as forgiveness and a shift in the concept of the world, and (5) Possibility of popular educational thought. "Life" is a value constructed from various aspects of life, subsistence, and activity, and it is the basis for the systemic nature of popular educational thought.

研究分野：社会教育学

キーワード：民衆 いのち 赦し 地域 窮境

1. 研究開始当初の背景

「自立支援」が教育・福祉・保健等の分野のキーワードになると同時に、支援実践の現場では「自立」と「人が育つこと」との間で、実践の価値をめぐる葛藤が生じている。これらの実践領域を支える理論として社会的教育学への関心も高まっているが、このことは後期近代ともいわれる現代社会において、改めて「人が育つこと」に関する理解を深める必要が生じていることを示している。この理解は、人々の日常生活を規定する思考方法や価値意識と相関するはずであるが、そうであれば日常生活の変動局面では生活において重視すべき価値の再考がなされ、それに伴い「人が育つこと」に関する理解やそれを踏まえた教育理解も変動する可能性がある。今後の教育の方向性を考える際に、実際生活の中で生成する教育理解を実証的に検討することが必要であるように思われた。

2. 研究の目的

新型コロナウイルス感染症の拡大により、当初に予定した調査の大半が実施困難になったために、実施可能な事例調査を前提として、研究目的を以下に限定した。

- (1) 日常生活を基盤に生成する民衆意識・思想の先行研究を踏まえ、日常生活の変動期における日常意識の変容の把握方法について解明する。
- (2) 日常意識の再構成の過程において、「人が育つ」ことにかかわる価値が意識化される過程と条件を事例に即して解明する。
- (3) 「人が育つこと」にかかわる価値の類型と日常生活の在り方を見直し再構成するための働きかけ（実践）の類型の相関を明らかにし、各類型に基づく教育思想が実効性を得るための実践的課題について明らかにする。
- (4) Social Pedagogy の国際的展開を踏まえて、以上の知見に基づく Social Pedagogy の展開可能性を検討する。

3. 研究の方法

- (1) 日常意識の変容の論理に関する分析枠組みは、民衆意識の歴史的変動を扱った民衆思想史の理論枠を変容的学習の論理としての活動理論と比較対照しつつ、Social Pedagogy の理論動向に位置付けて整理を行った。
- (2) 「人が育つ」ことにかかわる価値意識の変容については、地域社会の危機局面への対処の経験を有する実践事例に即して検討することとした。「自立支援」をめぐる葛藤は、現代の新自由主義的社会システムの下で生じているが、それは「人が育つ」ことを排除的性格を有する社会システムを前提として理解することへの違和感から生じているとも言える。その違和感は、「人が育つ」ことには支配的イデオロギーに回収されない根源的次元が存在するという直観の故に生じているとすれば、根源的次元は新自由主義時代以前の危機局面でも意識化されていたはずである。民衆意識はそうした歴史的経験をも含んで形成されていると思われる、事例分析においては過去の危機局面への対処の経験が現時点での読み取られ方に留意することとした。
- (3) 当初予定していた名古屋市の南医療生協及び高知県西土佐村の地域づくり実践に関する資料収集はコロナ禍以前に行っていたので、事例の比較検討は南医療生協と西土佐村を基軸に置き、さらにそれらから根源的次元として示唆された「いのち」に焦点化した実践の典型例として岩手県旧沢内村、秋田県上郷地区、大阪市の釜ヶ崎地区を位置づけて行った。このような限定の結果、民衆意識の変容は、保健・医療・福祉にかかわる地域づくり実践との関連で行うことになった。当初予定していた浦河べてるの家、奄美・沖縄、韓国の諸実践については研究会において研究分担者の報告に基づく検討を行い、事例調査の課題設定に反映させた。
- (4) 南医療生協及び西土佐村では長時間にわたるインタビューが可能であったため、中心的な実践者のライフストーリーを聞き取り分析した。他の事例では面接調査が困難であったため、既存の実践記録・調査資料や当該事例にかかわる種々の著作に基づく分析を行った。

4. 研究成果

- (1) 教育学の基礎範疇としての民衆概念の可能性
民衆概念は権力との対比で用いられる場合は、被抑圧者や大衆を含意する。支配 被支配の二

項対立図式に基づき民衆概念を理解すれば、教育の課題は権力的支配からの解放として論じられることになるが、現実には「民衆」内部での利害の対立は避けられず、民衆の側に常に正義が存在するとも言えない。本研究では民衆思想史における日常生活者としての民衆概念に学びながら、その理解を拡張しつつ教育学の基礎範疇として位置づける可能性を検討した。

現代の日常性は多様な生活文脈の交差によって特徴づけられ、その下で出来事の意味を一定の範囲内に収束させる主体の能動性の発揮によって維持されている。したがって、日常生活者としての民衆とは、経済や政治や文化、職場や家庭や地域等々にかかわる相対的に独立した文脈の下での意味を「プリコラージュ」として構成する主体を意味している。この意味での民衆は、労働者・農民・自営業者のみならず例えば官僚や経営者をも包含する概念である。

そのように理解された民衆概念は現代社会に対する批判的な主体としては無条件には理解できず、むしろ常なる状況を維持する保守性を備えているとみるべきであるが、同時にその内部に、現代の社会システムの矛盾を反映させ、葛藤を抱えて苦悩する存在でもある。自らに潜む苦悩は日常性の維持が困難になる「窮境」において顕わになる。その「窮境」をそれまで発揮されてきた能動性を維持しつつ、かつ批判的に再構成するときに、現代の社会システムに対する批判的な主体が形成される。

(2) 民衆思想における根源的価値としての「いのち」

対象事例はいずれも危機的局面に遭遇した経験を有する地域社会であるが、その経験は日常生活を維持する前提が崩壊する事態に直面したことを意味する。旧沢内村の生命尊重行政を主導した深澤村長は戦前から戦後にかけて社会システムの中心部から周辺部への移動を余儀なくされ、彼にとっての日常性の崩壊を経験している。それは自己崩壊にもつながりかねない危機であったが、「いのち」の次元を根底においた社会構想を志向するに至り、自己の再構成を地域づくりと重ね合わせて探求できるようになった。旧沢内村の場合は、地域社会が生命の再生産の危機に直面していたが、この客観的な状況と深澤村長の個人的な価値意識の転換が呼応することによって、「いのち」を日常生活の前提として措定する変化が地域社会レベルで生じた。

旧西土佐村では、満州分村の歴史的経験を自己の物語として統合するための種々の学習活動が継続されており、平和と「いのち」を結びつけた社会のあり方が模索されていた。その模索を基盤として地域の保健・医療体制の再構築が課題となり、旧沢内村の視察も踏まえて予防医療を重視した地域保健活動に取り組んだ。満州分村の経験が語られ地域で共有され始めるまでに40年近い年月を要しているが、この語りの開始と地域社会の限界への逢着が重なることにより、地域社会の日常の前提を、歴史的経験を踏まえつつ再構成する挑戦が始まったとみてよい。それは「いのち」の思想の模索と言い換えることもできる。

以上は地域社会の危機局面が日常生活の根源的価値への省察の契機となった事例であるが、南医療生協では日常生活に内在する葛藤を媒介的契機として「いのち」の思想の模索が展開している。理事ヒヤリングにおいては、企業社会の中核を担った経験を有する人々が、企業社会とは異なる価値を地域社会やそこでの相互扶助機能に見出し自己再構成の基盤としていた。効率を重視する企業社会のシステムに同化することへの違和感が、自己の物語の破綻に至らなかったのは、そのような自己形成基盤を保持しえたからであった。この場合は日常生活の前提が崩壊するような危機には直面していないが、日常に含まれる矛盾が徐々に激化するにも関わらず日常性を維持し続けられる条件として地域社会で経験される信頼や平等性、あるいはそれらに支えられた創造の可能性が位置づいていたとみてよい。その経験は伊勢湾台風による被災後の相互扶助や名古屋市南部の公害(ぜんそく)被害への集団的対応と結びつけられ、南医療生協の生成の物語として統合されている。この地域的な物語を構成する主要な出来事は日常生活の前提が崩壊する経験であり、「いのち」が根源的価値として浮上した経験である。

(3) 「いのち」を意識化する実践の論理

「いのち」は多義的な概念である。生命という意味では生物界全体に妥当する概念であり、生存(サブシステム)という意味では社会的・文化的に正常な循環を指示する概念であり、活動の相においてとらえれば「アニマシオン」をも含む。人間の固有性に即すると、自己と他者の不可分の関係もその中に含まれる。したがって、「いのち」の価値を理解する相に応じて、その意識化や価値の実現に向けた実践の在り方も異なる。

旧沢内村の場合は、生命の相が強く意識された。生死の境に立ち会うことを強いられる人々にとって、この理解は普遍的・絶対的な欲求に応えるものである。しかし、この相においては生命尊重が生命管理のための科学的システムに結びつく可能性をもっていた。実践的には「行政主導」や「医師主導」として現れる。旧西土佐村の場合は、満州分村の語りを共有する段階では生命の相が平和と結びついて意識されていた。旧沢内村の実践との共鳴もこの相でなされていた。

これらに対し、秋田県上郷地区における宮原伸二医師の実践は、住民の協働による健康づくりをめざし、文化的な活動も含めて展開された。生命・生存の相を超えた活動の相における「いのち」が意識化されることにより、日常生活を再構成する主体としての住民の形成が期待されていた。この試みは宮原自身によって上郷から西土佐村へ継承され、住民の協働による現状把握と課題解決のための学習と実践の組織化が重視された。この段階で、西土佐村における「いのち」の価値の理解は上記の三つの相を統合するものになったといつてよいように思われる。

このような統合過程は、釜ヶ崎における表現活動(ココルーム)や浦河べてるの家、南医療生

協の実践においてもみられた。釜ヶ崎ではホームレス経験者（A氏）のライフストーリーに焦点をあててココルームが主催する釜ヶ崎芸術大学の意味を確認したが、生存の次元で多様な戦術を繰り広げてきたA氏が、万策が尽きた状態で出会ったのが釜ヶ崎支援機構とココルームであった。そこでの詩作や演劇の経験を通じてA氏は生存を超えて活動の相の「いのち」の価値を意識化するに至った。これはA氏の個人的経験にとどまらず、釜ヶ崎芸術大学において集団的に経験されている意識変化である。これにより、A氏はホームレス状態になる以前の元会社経営者としての日常の活動の相から、生存そして生命の相へ世界を縮小してきた自己の物語を、再び創造的な活動の相にある日常に到達するための過程として再構成するに至った。

浦河べてるの家の当事者研究は、生命の相に焦点化した精神医学の管理モデルを批判し、生存の主体としての自由と誇りを回復する（苦労を取り戻す）ことを目指した実践を経て、当事者が生きる世界を共有可能なものとして表現し、その世界へのかかわりを協働で探求する実践といってよい。ここでも活動の相としての「いのち」の価値が意識化されることにより、自己の物語の書き換えが生じている。この研究という表現活動は、精神障害を「人間の苦悩を最大化した状態」（向谷地）として普遍的な文脈で理解することを可能にし、苦悩に共に向きあう過程としての回復という理解をもたらしている。

南医療生協の生協のんびり村や男塾の取り組みは、日常生活に潜む苦悩を表現し共有できる活動を地域で展開するものである。この実践も活動の相における「いのち」に価値を見出し、健康もその相において把握されているが、組合員のみならず地域の日常生活者を常に視野に入れ、その活動を地域社会に浸透させることが意図されている。これは組合員の拡大という関心もさることながら、日常生活者としての地域住民の「苦悩」を共有し、共に向きあうことに価値が見出されているからである。

（４）赦しとしてのシステムの再構成と世界観の転換

浦河べてるの家や釜ヶ崎・ココルームの実践は、「敵」を糾弾するためのものではない。それらの実践では、当事者たちは、日常生活者としての民衆の誰もが抱える葛藤や苦悩との対峙を、窮境に陥ったが故に徹底せざるを得なかった。その経験から可能性として仄かに浮かびあがるのは、生命・生存の相から活動の相までを統合した「いのち」が尊重される世界である。釜ヶ崎では、亡くなる人たちの葬儀も仲間の手で行われる。個々人の人生物語の完結である死が「いのち」が尊重される世界の中に位置付けられている。それにより釜ヶ崎の記憶の中に、そこに身を寄せてきた一人ひとりの物語が蓄積されていく。その物語の中に、現在の社会を超えた社会のモデルが潜んでいるように思われる。

浦河べてるの家の当事者研究は、精神科医をも当事者として巻き込むという展開も見せている。かつては精神障害者を管理し統治する側に立ち、浦河べてるの家の実践と敵対してきた医療・福祉の世界の人々の中に、従来とは異なる世界を障害当事者と共に探求する動きが生じている。

これらの実践は、窮境を現代社会の矛盾の凝集点として民衆が理解する時に、あらゆる出来事を二項対立図式に還元することによって既存システムの延命を図る現代社会を超えた社会モデルを民衆が生み出すことを示唆している。これらの事例に基づけば、敵対的他者を赦すとは、補償行為によるというよりも、現代社会を超える社会モデルの共同探求者（P. フレイレ）として相互に承認することを意味すると言えるであろう。

（５）民衆的教育思想の可能性

教育思想の体系性を正当化するものは教育において実現すべき価値である。転換期としての現代においては、「いのち」の諸相への省察が様々な領域で同時多発的に発生しているが、依然としてその諸相を一つにまとめ上げた価値を明らかにするには至っていない（Social Pedagogyの国際的展開に照らしてもそうやってよい）。したがって実践経験を通して彫琢される民衆の教育思想についても、その正当化論理は断片的なままにとどまっている。現状では転換期における民衆的教育思想を体系性を伴うものとして剔出することは困難であるが、本研究を通して、対象とした諸実践では窮境に向き合う過程で「いのち」という価値が意識され、社会的な実体として人々の日常に浮かび上がることが確認できた。その点に新たな教育思想の萌芽を見出すことができるように思われる。また、本研究で明らかにした赦しは、「いのち」という価値を前提に、それが簡単には実現しないという限界性を理解する場合に生まれる実践論であり世界観である。それは平和概念にも連続し、おそらく近代の自立観や発達（発展）観をも批判する論理となるであろう。以上の可能性が広がっているが故に、現代は転換期としての性格を有することを改めて確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮崎隆志	4. 巻 6
2. 論文標題 協働に基づくケア・コミュニティの意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床教育学研究	6. 最初と最後の頁 20-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyazaki Takashi	4. 巻 18
2. 論文標題 Developing critical education thought in community development: the Freirean approach in Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Asia Pacific Education Review	6. 最初と最後の頁 227-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎隆志	4. 巻 61
2. 論文標題 子ども支援実践における専門性の現代的構造 学童保育実践を事例に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本の社会教育：子ども・若者支援と社会教育	6. 最初と最後の頁 223-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎隆志	4. 巻 35
2. 論文標題 地域学習論の構図	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会教育研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Otaka Kendo	4. 巻 18
2. 論文標題 From “Employed Work” to “Associated Work” in Diverse Society	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Asia Pacific Education Review	6. 最初と最後の頁 235-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大高研道	4. 巻 304
2. 論文標題 共にはたらく協同労働の到達点	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 協同の発見	6. 最初と最後の頁 32-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 照本祥敬	4. 巻 34
2. 論文標題 新自由主義の教育会改革と公教育のゆくえ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 生活指導研究	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田純一	4. 巻 733
2. 論文標題 「土佐の教育改革」の継承と断絶	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊社会教育	6. 最初と最後の頁 48-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎隆志・内田純一・阿知良洋平	4. 巻 38
2. 論文標題 民衆思想における平等概念の構造と意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会教育研究	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎隆志・内田純一・阿知良洋平・大高研道	4. 巻 39
2. 論文標題 限界状況における価値意識の再構成 - 地域健康学習における生命思想の生成に着目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会教育研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 宮崎隆志
2. 発表標題 暮らしの思想の生成論理 地域社会教育の学習論・試論
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miyazaki, T. & Otaka, K.,
2. 発表標題 Transformation of "Value consciousness" and Reconstruction of Norm
3. 学会等名 The 18th International Conference on Education Research (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Otaka, K
2. 発表標題 2. Japanese Social Education System and 'KOMINKAN'
3. 学会等名 Pre-conference workshop - National system of adult, higher & lifelong education: Asian comparative workshop, The 18th International Conference on Education Research (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大高研道
2. 発表標題 コミュニティ媒介者としての協同組合の位置と役割 - 協同組合研究の課題
3. 学会等名 日本協同組合学会第37回秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮崎隆志・内田純一・阿知良洋平
2. 発表標題 民衆思想における平等概念の構造と意義
3. 学会等名 日本社会教育学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮崎隆志・内田純一・阿知良洋平・大高研道
2. 発表標題 限界状況における価値意識の再構成 - 地域健康学習における生命思想の生成に着目して -
3. 学会等名 日本社会教育学会第67回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮崎隆志
2. 発表標題 Community Storyの再編集としての協働の成立条件
3. 学会等名 日本社会教育学会大68回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Miyazaki Takashi
2. 発表標題 TWO SIDES OF AWARENESS IN CONSCIENTIZATION WITH HEALTH LEARNING RETHINKING FREIRE ' S LIMIT-SITUATIONS THEORY
3. 学会等名 The 21st International Conference on Education Research
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 宮崎隆志	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 232
3. 書名 街に出る劇場（分担執筆：第八章 アートによる日常性批判の可能性）	

1. 著者名 宮崎隆志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大学教育出版	5. 総ページ数 188
3. 書名 社会教育と福祉と地域づくりをつなぐ（分担執筆：第二章 暮らしづくりの支援における価値とその意義）	

1. 著者名 宮崎隆志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 226
3. 書名 地域づくりと社会教育的価値の創造 (分担執筆: 暮らしの思想の生成論理 地域社会教育の学習論 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	向谷地 生良 (Mukaiyachi Ikuyoshi) (00364266)	北海道医療大学・看護福祉学部・教授 (30110)	
研究 分担者	大高 研道 (Ohtaka Kendo) (00364323)	明治大学・政治経済学部・専任教授 (32682)	
研究 分担者	照本 祥敬 (Terumoto Hirotaka) (10227530)	中京大学・教養教育研究院・教授 (33908)	
研究 分担者	小栗 有子 (Oguri Yuko) (10381138)	鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授 (17701)	
研究 分担者	辻 智子 (Tsuj i Tomoko) (20609375)	北海道大学・教育学研究院・准教授 (10101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡 幸江 (Oka Sachie) (50294856)	九州大学・人間環境学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	荻原 克男 (Ogiwara Yoshio) (70242469)	北海学園大学・経済学部・教授 (30107)	
研究分担者	宋 美蘭 (Song Mirang) (70528314)	北海道大学・教育学研究院・非常勤研究員 (10101)	
研究分担者	内田 純一 (Junichi Uchida) (80380301)	高知大学・教育研究部総合科学系地域協働教育学部門・教授 (16401)	
研究分担者	白水 浩信 (Shirouzu Hironobu) (90322198)	北海道大学・教育学研究院・教授 (10101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Toward Critical Social Pedagogy- New Perspective in transformative learning	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 東アジアにおける新たな教育思想の展開	開催年 2017年～2017年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------